

日本学術会議 幹事会附置委員会
フューチャー・アースの推進に関する委員会（第1回）
議事要旨

1. 日 時：平成 25 年 8 月 26 日（月）10：00～12：20
2. 場 所：日本学術会議 6-A（2）会議室
3. 出席者：大西会長、春日副会長、杉原委員、山本委員、中島委員、安成委員、沖委員、
小池委員、小林委員、三枝委員、山形委員、江守委員、谷口委員
欠席：花木委員、氷見山委員、中静委員、春山委員、毛利委員、植田委員、植松委員、
蟹江委員、児玉委員
参考人：文部科学省 木下環境科学技術推進官
事務局：飯島事務局次長、盛田審議第二担当参事官、佐藤国際担当参事官、
清田国際調査係長、増永審議第二担当付

4. 配付資料：資料1 委員名簿
資料2 設置提案書及び設置要綱
資料3 アジアにおける F E の戦略的科学計画案の策定
資料4-1 持続的な地球環境のための研究の進め方について
中間とりまとめ（論点整理）（概要）
資料4-2 持続的な地球環境のための研究の進め方について
中間とりまとめ（論点整理）
資料4-3 フューチャー・アース初期設計報告書 抄訳
資料5 F E 国際事務局公募対応に関する意見交換会（要旨）
資料6 フューチャー・アースの推進に関する委員会の活動提案
資料7 Future Earth：ICSU 等の動き
資料8 平成 25 年 6 月 18 日学術フォーラム アンケート集計表
資料9 日本における Future Earth 組織案

5. 議 事：

1. 委員長の互選、副委員及び幹事の同意・指名
互選により、安成委員が委員長に選出された。
委員の同意を得て、杉原委員が副委員長に、江守委員と蟹江委員が幹事に指名された。

2. 本委員会の役割について
安成委員長より、資料2に基づいて、本委員会の設置提案等の説明があった。

3. F E に関するこれまでの経緯

- 国際動向について、春日副会長より、資料7に基づいて、近々の I C S U 等の動きについて説明があった。
 - ・今年の初めに暫定事務局長の募集と科学委員会のメンバーの公募があった。選考が予定より少し長引いたようで、科学委員会について6月、暫定事務局長について7月に発表があった。このときから、暫定事務局がスタートしている。
 - ・当初の予定では、今年の1月からだったので、約半年遅れている。
 - ・暫定事務局は18か月間のミッションとなっており、来年の年末まで暫定事務局がカバーする。この18か月の間に、本格的な事務局の設置について議論が進められることとなる。2015年の年頭から発足する予定で、10年間、本格的な Future Earth が始まる。
 - ・今年の6月16日に Science Committee の委員の発表があり、日本からは安成先生が委員として選出されている。Chair として Mark Stafford Smith 氏が、Vice-Chairs として イギリスの Melissa Leach 氏、南アフリカの Belinda Reyers 氏がそれぞれ選出されている。
 - ・7月1日になって、暫定事務局長に Frans Berkhout 氏が選ばれた。7月9日に、ICSU、ISSC の方から、10年間の本格事務局を担う Permanent secretariat の募集が開始されたとの案内があった。9月23日に第一次の応募締切となっている。

○安成委員長より

- ・ Science Committee は 18 名おり、半数が女性である。
- ・ 1 回目の Science Committee Meeting が 11 月末に南アフリカで開かれる。との報告があった。

○安成委員長より、Future Earth について、アジアで何をやろうか有志で検討した、戦略的科学計画案について、資料 3 に基づいて説明があった

- ・ 呼びかけをしたのは、ESSP の下にあるアジア地域のオリジナルプログラム MAIRS (Monsoon Asia Integrated Regional Study)
- ・ 7 月 31 日から 8 月 2 日まで、香港の理工大学で 20 名弱が参加してドラフティングを行った。
- ・ ドラフティングはコンテンツごとに担当を決めて作業を行うこととしている。日本からも安成先生のほか、小池先生、蟹江先生、谷口先生が参加されている。
- ・ 作成したものは、11 月に 1 回目の Science Committee Meeting が開かれるので、そこで議論してもらう。
- ・ ドラフトは 8 月いっぱいにして、9 月の中ごろまでにはとりあえずのバージョンをまとめたい。できれば、この委員会の方には展開して、ブラッシュアップしていきたい。

ここで、より広いコミュニティからコメントを求めるつもりはないかとの質問があった。

- ・ 勿論、考えている。少なくとも、学術会議以外で、フューチャー・アースに関係している方にはコメントを求めたい。
- ・ 実行が可能なことを含めて、想定して、コメントを求めたい。

また、ICSU の作った Initial design report、文部科学省の「持続的な地球環境のための研究の進め方について 中間とりまとめ」、この資料 3 のアジアにおける FE の戦略的科学計画案の策定は、お互いに独立しているものなのか、との質問があった。

- ・ それぞれ、レベルが異なるものであり、別のものと考えている。

限られた地域の方々しか、資料 3 のドラフト作成に参加していないのに「アジアの」と言い切って良いのか、との質問があった。

- ・ ドラフティングは少人数で行い、より広く意見を求める。アジア各国の関係者にも、このドラフトを展開したい。
- ・ 11 月には、応募者間会議も開催されるため、アジアからこのように意思表示を出しておくことが大事ではないか、その際には、Chapter 1 が重要になるだろう、との意見があった。
- ・ ステークホルダーの在り方や、シビルソサエティについては、ヨーロッパとアジアでは異なっており、アジアのシビルソサエティの在り方の多様性を強力に出しておく必要がある、との意見があった。

○国内動向について、文部科学省研究開発局環境エネルギー課の木下圭晃環境科学技術推進官から資料 4-1 及び 4-2 に基づき、持続可能な地球環境研究に関する検討作業部会において作成された「持続的な地球環境のための研究の進め方について 中間とりまとめ」について説明があった。

- ・ 文部科学省として、どういった形でフューチャー・アースの選考をバックアップしていけるかを検討するために、持続可能な地球環境研究に関する検討作業部会を設置し、3 回にわたって議論を重ねてきた。
- ・ 7 月末に議論を終えて、8 月 2 日に親委員会へ報告をしたところ。
- ・ 持続可能な地球環境研究に関する検討作業部会は、安岡東大名誉教授に主査をお願いし、議論を重ねてきた。
- ・ 体制整備については、フューチャー・アース本部事務局又はアジア地域事務局の誘致を目指すことが、重要であろうとの意見を頂いた。

- ・ 色々なステークホルダーとの連携が必要であることをまとめた。
- ・ 地球観測、観測情報の共有、モデリング・理論構築は今後も必要であり、今後、科学コミュニケーションの役割が、より一層重要となるであろうことをまとめた。
- ・ 文部科学省として、これをベースに何ができるかということで、予算要求と言った形で調整を行っているところ。また、関係のある J S T などとも連携しつつ、検討を行っている。
- ・ 国内委員会については、資料 4-2 の 23 頁に、国内委員会を早急に整備すべきであるということを明記した。政府と学術界のみならず、産業界、市民団体、自治体、メディア等の参画を確保することが重要であるとしている。

○その後、今年 6 月 18 日に開催された学術フォーラム「Future Earth：持続可能な未来の社会へ向けて」のアンケート結果について説明があった。「今後、日学がこの問題を更に議論するとしたら参加するか？」とのアンケート項目に対し、アンケート提出者数 120 名のうち、104 名が参加すると回答していたことから、次回開催について検討された。

4. 当面の活動

○Future Earth 国内委員会の立ち上げについて、資料 9 に基づき、春日副会長から説明があった。

- ・ Future Earth 国内委員会については、新しい概念が必要ではないか、国内委員会が Government な委員会となると、機動的に動けないことがあり、柔軟性にかけるのではないか、との意見があった。
- ・ ナショナルレベルでフューチャー・アースの委員会ができてるのは、ドイツ。
ドイツのナショナルコミッティは、6 名程いるが、全員、研究者であり、日学のこの委員会に近いとの話があった。
- ・ ターゲットがないと、コアデザインが固まらない。第一段階としては漠としていても、ターゲットを示した上で、ステークホルダーをいれて、揉んでもらうのが良いのではないだろうか、といった意見があった。
- ・ キープすべき大きな枠組みを考え、その形を早くからアピールするような形で、進めて行ってはどうか。
- ・ 2015 年には国連防災会議が開催されるので、従来から定着してきている「持続可能な開発」と「防災」を絡めてみてはどうか、との意見があった。
- ・ この委員会がドラフトを作ってコメントを求める際、コメントに基づきドラフトを大きく見直すことがあり得るという柔軟な姿勢を見せることが重要ではないか、との意見があった。

○国際 Future Earth Engagement Committee への人選については、まだ始まっていない（遅れている）ようだとの報告があった。

○本委員会としてやるべき課題を、安成委員長あてに出していただくこととなった。
(掲示板を利用するとのこと。)

○学術会議の次回シンポジウムについては、早ければ年内、遅くとも年度内に開催したいとの話になった。

○国際事務局誘致への対応について、安成委員長から、資料 5 に基づいて説明があった。
・ 9 月 23 日が提出期限となっている国際事務局及び地域ノードの公募への意思表示を行う。
(意思表示に必要な文書は、安成委員長、春日副会長が中心となり作成する。)

5. その他

○谷口委員から、資料 6 に基づいて説明があった。

- FE in Japan / Asia Platform について、学術会議 HP でリンクをはることとなった。